

救護第22班 4月28日～5月5日 薬剤師・馬場 貴子



鳴瀬支所の救護所は仮設テントでしたが、突風に飛ばされ、支所の一室を借りました。

受診は1日に10人程度で急性の患者はほとんどいませんでしたが、休日に自宅の片付けに帰ってきて、釘を踏んだり手をけがしたりした、切り傷の患者が印象に残っています。

牡鹿半島への巡回は私たちのときに始まりました。他の、大学などの救護チームの後を受けて私たちが入り、4カ所程度を巡回しました。半島に行く途中の道は瓦礫も整理されていましたが、山道で道路の半分がなくなっているとか、帰りに満潮が重なって道路が冠水していたとか。半島南部の避難所も、満潮のときは冠水するということでした。

巡回した避難所には20～30人いましたが、急性はかぜぐらい。桜の満開の時期でアレルギーの人が目立ち、嘔吐・下痢の患者もいました。石巻赤十字病院から薬を配達する態勢ができていました。巡回診療に持っていくのはかぜや腹痛、救急セットぐらい。処方した薬は病院から配達してもらい患者に渡していました。

私たちが帰熊する前の夜(5月4日)、班員にノロウイルス感染者が出て、2人が飛行機に乗れず一緒に帰れませんでした。熊本に帰るときもそのことが気がかりでした。

